
ゼロの魔眼を持つ男

土御門 零慈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

人物紹介

神崎 零兔 かんざき れいと

本作の主人公。三年の時後期に聖魔中学に転校した。理由は不明。生まれた時から邪悪な魔力を宿した右目を持っており、その魔力を身体全体に流す事によって、常人では有り得ない身体能力と生命力を得ることができる。
因みに、彼には二つ下の妹がいる。

神崎 零凧 かんざき れいな

主人公の妹。世界最強の魔導師と言われていたが、『原典』に触れ、封印された。能力名は「氷結の瞳」「トルド・アイ」。視界に捉えた標的に念じるだけで一瞬で凍らせる事ができる。

双葉 歌音 ふたば かのん

主人公が聖魔中学校に転校した時に仲良くなった娘。主人公の事が好きで毎回その事をアピールしているのだが、残念ながら主人公は気付いていない。得意魔術は風を司るエレメントの操作で、瞬間移動をする事が出来る。

ゼロの魔導師

―序章―

その名はゼロ

東京都内の某所。其処で、1人の少年と1つのグルーブが睨みあっていた。すると、グルーブから、怒りの混じった声が放たれた。「この間はよくもやってくれたな？」すると少年も口を開く。「さあ？ そんな事ありましたっけ？」まるでからかうかの様な態度に1人の男がキレた。「テメエ！ 舐めた事ほざいてんじゃねえぞ！！」「はあ、面倒なことは避けたいんだけど．．．仕方ないか。」「テメエ、何言っ」「グチャツ」．．．！！」「男達は理解出来なかった。目の前の光景を自分の仲間が潰されと言う事実を．．．。そして、それをやったのが少年だと言う事も。

そう、冷たい笑みを讃える碧い瞳を持ったあの少年だと言う事を．．．。

此処は2100年の日本。

現在、世界では魔術が使用されている。

魔術とは、数十年前に発見された科学では説明出 impossibleな法則を持った現象の総称である。

それを、童話やファンタジーの中に出てくる異能の力、魔術と呼ぶ様になった。しかし、魔術は、全員が全員使える訳ではない。

魔術にも適性があり、その適性を持つ者は少ない。故に魔術は希少なものであり、それを行使出来る人間は魔術師と呼ばれ、その能力を使い、一般人には出来ない作業をしたり、危険な仕事を請け負ったりしていた。

そして、日本では、こうした魔術師を育てるために、専門の学校が造られてた。魔術分野専門習得学科。通称、魔術科学園。魔術科学園には、中等部から高等部までの学年がある。

そして、この学校に転校してきた「少年」こと神崎かんざき 零兔れいと。通称「

ゼロの創造者」

全てを破壊する彼の能力からつけられた二つ名である。元々彼には魔術の才能は無い。にも関わらず、か彼がこの学園に転校して来たのにはある理由がある。それは、彼が魔術とは別の能力ちからを使えることだ。そして、その能力を使った時、彼の右眼が碧い光を放つ。

彼の瞳に出る碧い光は先天的なものであった。そして、先天的に異能を行使出来る者を人々は魔導師と呼んだ。そう、この神崎 零兎、彼こそ、世界で20人、日本には3人しかいない魔導を司る者、魔導師なのである。

因みに、魔術師は、多少優遇される事はあっても基本的には、一般人と同じ権限しか与えられていない。それに対して魔導師はその希少性から、優遇は勿論、警察機関への捜査協力や、過度の自衛行為も認められている。

先程、暴力団を殲滅した事でさえ、彼ら魔導師にとっては過度の自衛行為に過ぎないのである。

ただし、魔導師にも破ってはいけない規則がある。それは、無意味に他人を傷付ける事、それから、『魔の原典を知る事』。前者の方は、どんな人間にも在る決まり事だが、後者の『魔の原典』まのげんてんを知ってはいけないと言うのは、魔術師には適応されていない。

いわば、魔導師のためにだけ創られた専門の抑止力なのである。そして、この規則が創られた事で、『原典』に興味を持ち、閲覧した魔導師が、過去に1人だけいた。その魔導師の名は、「神崎 零凧」
(かんざき れいな)

そう、零兎の妹であり、世界最高ランクの魔導師と称された少女。しかし、少女は、その能力に溺れ、『原典』に手を出し、処刑された。いや、正確には封印されたのだ。それは、彼女の魔法「氷結の瞳」(コールド・アイ)の力が、あまりにも強く、殺すことは疎か、封印ですら、かなりの低確率だったのだ。

そう言った事情を踏まえれば、寧ろ封印に成功した事を喜ぶべきだろう。

氷の女王（クイーン）

―二章―

クイーンの帰還

「此処はどこだ？」零兎はそう呟くと、辺りを、見回した。しかし、彼が認識出来たことはすくない。それは此処が自分の住んでいた街で、今は殆ど氷に覆われているということだけだった。だが、零兎はこの景色を遠い昔に見た事がある。「この景色、昔どっかで見ただけだなあ。．．どこだっけ？」「フッフ、コツチだよ。お兄ちゃん」「！！！！」「ちよつと待つてくれよ、零凧あゝ」「もう！！、情けないんだからあゝ」（あれは、六年前の俺たちか？）そして、れいとは、新たな事実を発見した。それは、此処が夢の中だという事。

それと、この記憶が魔術によって操作されているという事。「誰かは知らないけど、これは処罰の対象だよ？」「だったら、どうだと言うんだ？」「そんな悪いヤツには罰が必要だと思うんだが？」「ニヤリ」「．．お前、こう言う状況何気に楽しんでるだろ。」「あれッ、

そんな風に見えるのか？」「違うのか？」「いや、全然。」「そう言うのと、零兎は己の内に秘めた邪悪な魔力を相手の魔術によって作られた空間に極微量放出した。

すると、魔術を掛けていたであろう人間の断末魔の叫び声が空間が崩壊する音と共に響き渡った。あっさりと消えていった夢を少し思い返しながら零兎は呟いた。「ここは．．．教室か？やれやれ、最近は精神干渉魔術を使って遠隔攻撃して来る輩が増えてきたな」

（でも、今回の犯人には感謝しなきゃな。お陰で、懐かしい思い出に浸る事が出来た。）「．．．零凧、か。」

「どうしたの転校生くん？」「もう2週間も経ったんだからいい加減、転校生はやめてくれ」「別に、いいじゃない？」「俺には神崎

零兎と言う名前があるんだが．．．。「あら、私の事を名前で呼んでくれないアナタが言う事かなあ?」「あー、わかったよ双葉さん」ハア「そこっ!溜息つかない!!そして、私のことは歌音って呼びなさい。」「ピシッ」「何故に命令形?それから、指差すな。」「なに、なに?もしかして、私の細くて綺麗な指先に惚れて目が向けられないの?」「ニヤニヤ」「その綺麗な指先を赤黒い肉塊に変えるぞ?」「えっ!綺麗?今、綺麗って言うてくれた?」「キラキラ「ああ、言ったけど?」「(えッ?どうしよう、零兎くんが綺麗って．．．きゃー．．．ダメよ。落ち着きなさい私、零兎くんは私の指先が綺麗って言いたかったのよ。きつとそうよ)」「どうでもいいけど、なんか寒くないか?」「えッ?そ、そう?」「大丈夫か?声が上がってるぞ?」「(心配してくれるの?なんて優しい男性ヒトなの。)」
「．．．あれ?なんか窓に霜が付いている。今、7月なのに。」「まさか!」「どうしたの?」「．．．来る。零凧が、妹が。」「妹さん?へエ、どんな娘なの?」「世界最強の魔導師であり、『原典』に触れて封印された者。」「えっ、零兎くんの妹が世界最強?」「原典』に触れた?そして、封印された?ちよつとまって、零兎くん、アナタの苗字って神崎よね?」「確かに今は神崎だが、昔は『霧崎』だった。」「それに、『原典』に関わった魔導師は処刑されるはず。例外は無い筈よ。」「．．．殺せなかったのさ。誰にもな．．．
本人に例えその気がなくても、魔法が勝手に攻撃を防いでしまつ。だから、零凧は、妹は封印され、処刑されたことになった。」「ウソでしょ．．．魔導師士団でも、倒せなかったつて言うの!?」「ああ。」「零兎は頷くと教室の入口に目を向けた。そして、その動きにつられて入口をみた歌音は絶句した。だって、其処にいたのだから。有史以来、最強の魔導師と謳われた少女が。そして、少女は口を開く。「ただいま。お兄ちゃん」「その背におぞましい冷気を噴えながら少女はニコリと微笑みながら、零兎に問う。「でも、なんで助けてくれなかったの?お兄ちゃんなら出来た筈なのに。ねえ、どうして?」教室が一瞬で凍り付いた。

―無―

「フッフ、久しいわね、会いたかったのよ？お兄ちゃん．．．。」
彼女はそれだけ告げると右眼を瞑り、詠唱を始めた。

「我は冷酷なる氷の精と契りを交わした者なりて汝、我との誓いを呼び覚まし、その証を示せ．．．全てはゼロの名の下に。」

すると、彼女の右眼が冷たい白さを称えた光を放った。

「．．．零風、やはりお前も（．．．）『原典』を知ってしまったのか。」

零風の右眼から出た光を見た零兎は静かに尋ねた。

しかし、その発言に反応したのは零風ではなく、歌音だった。

「神崎くん、お前も（．．．）ってどう言う事!？」

「．．．俺も」「えっ?」「俺も『原典』を知ったんだ．．．。」

信じられないと言う様子で歌音が立ち尽くして居ると、零風は嘲笑うかのように零兎を見下ろしながら、こう言った。

「そう。そこに居る男は、『原典』を知った。それも私よりも深い所まで!！」

零風は更に言葉を続ける。

「私なんか、冒頭部分を読んだだけなのに封印されたのよ?なのに、その男はなんの罰も与えられずにいつも通りに生活している。―冊全てを読んだのにも関わらずね!！」

「そろそろお前にも話さなきゃいけないか．．．。」

「何を話すって言うの？散々私が苦しんでいた時に、それ以上の事があつたって言うのッ！！」

「俺は今、2冊の『原典』を管理しているんだ．．．。」

「神崎くん！？それはどう言う「ゴスツ」．．．こ．．．と」「バタッ

「悪い歌音、少し眠ってくれ．．．。」

零兎は、歌音を部屋の角まで運ぶと自分の着ていた制服の上着を、そつと歌音に掛けた。

そして、今まで絶句していた零凧は、いきなり零兎に突っ込んだ。

「無駄なんだよ零凧．．．俺には「氷結の瞳」はきかないんだら．．．」

それだけ言うと零兎は、一瞬右眼を閉じ、すぐに開いた。

零兎の眼は蒼く輝いていた。

そして、零兎は魔法を発動した。「破壊神の裁き（ジャツジメント）」

しかし、彼の身体にも周りの様子にも変化はなかった。彼は、左脚を床に叩きつけた。

すると、床が崩れ、校舎が崩れ、大地に巨大なクレーターが出来た。零兎は崩れた校舎から少し離れた所に歌音を抱えて立っていた。

零兎は、歌音を抱えたまま再び口を開く。

「もう一度眠れ．．．零凧」「ゴトッ

「！？」

「勝手に殺さないでよお兄ちゃん。でも、今のは痛かったなあ。」

「やっぱり、この程度は地中に埋める事すらままならないか．．．。」

「

零兎の言葉をきいた零凧は、バカにした様な言い方でいった。

「この程度、ねえ」。それって、負け惜しみ？」

すると、零兎の右眼が、更に強い光を放った。

「・・・じゃあ、試してみるか？」

―無―（後書き）

唐突ですが、私は現在中学生をしていますが、今週から学生なら誰もが嫌がる地獄の1週間が始まるんです。（テスト週間）

そのため、来週の投稿をお休みしたいと思います（^^;;;

まあ、受験を控えた学生にとっては、重要なテストなので、許してくださいm（―）m

― 終結 ―

「・・・じゃあ、試してみるか？」

零兎はそう言うと、スツと左腕を掲げた。

その手の甲には、魔法陣が刻まれていた。

「フツッ！ 見たことの無い魔法陣だけれど、恐るに足りないわね。貴方の様な欠落品（魔導士）に扱える魔術なんてたかがしれてるもの！..！」

「この魔法は『原典』の中でも禁忌の魔法として記されている魔法の一つ、「時の支配者」^{タイム・ルーラー}。」

「ア、アーカイブの一つである「時の支配者」を習得したと言うの！？」

零兎は静かに頷くと、静かに詠唱を始めた。「我、禁忌の一つ、時の司を知りし者なり、汝、古き契約に従い、我の力となれ・・・全てはゼロの名の下に。」

詠唱を終えると、零兎は悲しそうな表情^{カオ}でもう一度、妹に尋ねた。

「本当に大人しく引き下がる気はないのかい？」

「ツ・・・と、当然よ！..！」

「そうか・・・。」

それだけ言つと、零兎は腕を振り下ろした。

(お兄ちゃん……………助けて。)

「…………あれ？私、生き…………てるの？」

零凧が辺りを見回すとそこには、必死に笑いを堪えている兄の姿があった。

「それ…………を言葉にしてくれば可愛いのかな。」

数秒間フリーズしていた零凧だったが、ようやく何故、兄が笑っていた。理由を理解した零凧は顔を真っ赤にして叫んだ。

「リード・ア・ハート読心術を使ったのね!!」「戦いつて言つのは、相手の虚を突く事に勝負が掛かっているからね。」

ケラケラと笑う兄を、黙らせようと、魔法を発動しようとした零凧だったが、そこで、自分の身体に違和感を覚えた。

(魔法が使えない?)

「理由は単純だよ。」

まだ、聞いてたのか、と舌打ちしそうになるのを堪えて零凧は聞き返した。

「どつ言つ事？」

「零凧、君の魔力は僕がすべて封印したんだ。」

「なんですって!?!？」

「僕は、自分の命を糧にして、キミの魔力を封印したんだよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3012y/>

ゼロの魔眼を持つ男

2011年12月15日23時51分発行